続・人も世も花も

芦塚秀雄

© 1963. *by* Hideo Aragaki

昭和三八年七月三一日　第一刷発行

続・人も世も花も

定価　四八〇円

著者　荒垣秀雄

東京都千代田区神田宮本町一〇

発行者　神田龍一

東京都千代田区神田鎌倉町一三

印刷所　鎌倉印刷株式会社

著者との協定により検印廃止

発行所　東京都千代田区神田宮本町一〇　株式会社　春秋社

電話東京(251)四七一五・六五七五

振替口座　東京　二四八六一

落丁・乱丁本はお取り換えいたします。

〔小林製本〕　N. D. C 914

目次

正月風俗の変化……11
寅・虎……12
長谷川伸と田淵寿郎……13
日清戦争なみの交通死……14
日めくり、カレンダー……15
朝潮の引退……16
山の遭難の経済学……17
成人の日……18
歌会始の盗作……19
〝日中共同の敵〟……20
年号と西暦……21
平凡な運転哲学……22
江田書記長……23
押す癖……24
フルシチョフ氏はどこにいるか……25
一千万都市の病根……26
アメリカナイズ……27
立春正月……28
団十郎襲名……29
スポーツに政治の壁……30
テレビの世界中継……31
さよなら昭和基地……32
R・ケネディ旋風……33
オランダの〝私服軍人〟……34
パワーズ飛行士ら捕虜交換……35
官僚の抵抗……36
グレン衛星船……37
吉田文五郎の死と文楽……38

選挙法改正の答申無視……39
法の石頭……40
安雛……41
殺生禁断国のクーデター……42
核実験を再開するな……43
OASの暴状……44
地震予知計画……45
人類としての核反対……46
報いられぬ消防団員……47
ニセ千円札と佐野乾山……48
子供と親……49
珍鳥トキと平城宮跡……50
〝平和の人質〟……51
桜の国の幻滅……52
アルジェリアの停戦……53
日本の沖縄……54
一浪・二浪……55
義を見てせざるは……56
うちの子に限って……57
富士山は誰のものか……58
文化財貧乏……59
軍人の政治介入……60
アホウドリ……61
日本の宿料は高い……62
偶発核戦争……63
死のタイトル・マッチ……64
日の丸……65
国連貧乏物語……66
女性とは？……67
カザルスの悲願……68
子供の奇禍を防ぐには……69
人類の85％は核持たぬ国民……70
公共的には〝不潔の民〟……71
南極の夢よ、もう一度……72
水キキンと短い川……73
なめられる〝勇なき社会〟……74

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寝床で交通事故死……75
鳴放政策再版……76
サラン将軍の逮捕……77
新緑の息吹……78
児童・心理ドック……79
大気圏内核実験……80
占領時代のしっぽ……81
陛下の自然愛……82
水　水　水……83
長者番付にない政治家……84
三河島衝突惨事……85
歴代都知事は桶屋だった……86
愛　鳥　週　間……87
人間・青田買い……88
おふくろの味……89
科学者京都会議……90
学力の地域差……91
名画の盗難……92
発煙筒はどこにあるか……93
サリドマイド禍……94
八海事件と裁判の長期化……95
在日米軍の飛石移動……96
宇宙飛行士ガガーリン……97
愛の鐘と善意の泉……98
宇　宙　飛　行……99
三河島惨事の起訴……100
ベルリンの恥辱の壁……101
少　年　犯　罪……102
韓国の言論〝浄化〟……103
アイヒマンの絞首刑……104
鮎　の　一　生……105
選挙と〝考える票〟……106
沖縄の民政……107
ワンセットの北九州市……108
ラオスに統一政府……109
ノーチップの日本……110

三河島事件と国鉄の精神……111
父親下宿人論……112
大樹は切るべからず……113
焼岳の爆発……114
パラリンピック……115
子供の落し穴……116
鳥獣保護法へ……117
ハラ切り思想……118
大学の在り方……119
郵便局のつまみ食い……120
道具箱会議……121
台湾海峡の謎……122
貝殻追放……123
七月の自然……124
〃宗教政党〃……125
金のかかる選挙……126
梅雨前線豪雨……127
政党の老齢化と若返り……128
麻薬亡国……129
超高空の核爆発……130
テレビ中継衛星の成切……131
学力調査を生かす道……132
オリンピック客の受入れ方……133
アルキメデス号の深海潜水……134
第二軍内閣……135
飲むな、飲ますな……136
地下共同溝……137
教育ママさん……138
旅客機墜落と垂直離着陸……139
〃最後の核実験国〃……140
自然教育園を守れ……141
やせ女・ふとり男……142
台湾バナナとコレラ……143
老人の自殺……144
サリドマイド・ベビー……145
広島原爆二二五万発……146

ひき逃げ許すまじ……147
いくじなしの原水禁大会……148
踏切地獄……149
柳田国男の死……150
嘉門次の一服……151
敗戦十七年……152
単独ヨットの太平洋横断……153
ボストーク号のアベック飛行……154
民間協力の犠牲者……155
モンロー自殺の意味するもの……156
交通キップの発足……157
ヒマラヤ頂上と人間……158
北極海底のランデブー……159
三宅島の大爆発……160
ジャカルタ大会の紛争……161
宿題と夏休みの再検討……162
金星ロケット……163
核停への一歩……164
関東大震災がまた来たら……165
宙に迷う旅客機……166
ストと鉢巻……167
汚されたジャカルタ大会……168
U2型機の侵犯飛行……169
非行少年と経験型……170
吉川英治の死……171
ぐれん隊防止条例……172
ガンの謎……173
国府のU2型機……174
五輪の責任体制……175
アジア大会はなかった……176
老後の生きがい……177
湖畔山荘の十人怪死……178
深夜の列車強盗……179
虐鳥と愛鳥……180
七人焼死……181
夏型の秋……182

結核をなめるな……183
オリンピック委員長の辞任……184
ケチな消防予算……185
子供の遊び場を横取りする大人……186
自由化の波紋……187
黒白共学さわぎ……188
大豊作と米の値上げ……189
宇宙漂流飛行……190
麻薬征伐……191
骸骨の立札……192
サリドマイドを防いだケルシー女史……193
列車内の暴力……194
炭鉱の明暗……195
寮歌リバイバル……196
救急車と脳外科……197
ワイセツ裁判……198
三―五選知事……199
宇宙船ランデブー計画か……200
完全犯罪……201
文化勲章の盲点……202
人類一人当り十五トンの原爆……203
米国のキューバ海上封鎖……204
中印国境の戦争……205
車道照明……206
国体と県民性……207
秋の風物……208
正宗白鳥の死……209
キューバ危機救わる……210
ソ連の〝火星1号〟……211
皇太子夫妻の比国訪問……212
教育九十年の移り変り……213
米中間選挙とキューバ……214
交通違反に厳罰……215
疑問視される遭難の真相……216
ブラジルの細江医博……217
教科書無償……218

京浜運河のタンカー炎上……219
西独シュピーゲル事件……220
勤労と休養は盾の両面……221
キューバ事件の戒め……222
山谷騒動と吹だまり……223
冬晴れの恵み……224
デパート屋上から飛降り自殺……225
消防白書……226
江田ビジョンの否決……227
ニセ千円札一周年……228
無罪となった奇形児殺しの母親……229
寒冬の周期説……230
マラソン日本……231
越冬ツバメ……232
巌窟王と新聞記者……233
スモッグ禍……234
中共封じ込め……235
スモッグと清空法……236
減税のスリかえ……237
ホワイトハウスの紫電話……238
豊富の中の貧困……239
モナリザと笑いの歴史……240
国会のカラ回り……241
スモッグから青空をとりもどせ……242
ひったくり……243
牛歩戦術とフィリバスター……244
木の実は旅人と鳥にも……245
安楽死の判決……246
キューバ捕虜と医薬品の交換……247
消防技術の近代化……248
結婚ブーム……249
海外移住とフロンティア……250
今年の回顧……251
歩行者を守るには……252
あとがき……253

装丁／村越襄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

続・人も世も花も

正月風俗の変化

ことしの正月は、年賀状も遅配なく元日にとどいたようで、まずはめでたい。モチはやや乏しいのが玉にキズだが、ちかごろは松の内じゅうお雑煮をいわう家庭も少なかろうから、それも苦になるまい。若い世代はオセチ料理などは見向きもせず、西洋風のものを食べたがる。

正月の暮し方もずいぶん変ってきた。若い男女はスシ詰列車の苦労をものともせずスキーに出かけて、正月を寒烈の銀世界にころんで過ごす。危険を冒して冬山に登るのも多い。家にいる親たちはハラハラしている。

古い世代の正月は静的で内省的だが、新しい世代の正月は外向性で活動的になった。新年には何か特別な感懐を覚えて〃一年の計〃を立てるという考え方よりも、正月も要するに〃休暇〃だという受取り方のようだ。

そこに何となく新年らしい〃折目〃に欠けるものがあるといえよう。獅子文六さんは「正月の下落」という一文のなかで、いまの子供にとって正月がつまらなくなったのは、年齢が満勘定になって、正月を迎えても年をとらなくなったからだと書いている。

たしかにそれも〃正月の折目〃が一つ失せたことではある。が、いまの子供は正月の前にクリスマスと同じく、お誕生祝いという行事が一つふえたことを喜んでいるかもしれない。

正月の折目の喪失といえば、古ぼけた門松もそうだ。十二月早々から立てた商店街の門松が、竹の葉も枯れてうらぶれているのは味気ない。商売とはいえ、季節感をあまりに無視したもので、新しい年の気分をそこなう。季節の折目はもっと正しく尊重したいものである。

さて新年ともなると、この一年が佳い年であるようにと、平安を願う心はだれしも変らない。気になるのはやはり世界平和のことである。ささやかなわが家の幸を祈りながら、つつましく毛糸を編む主婦の胸にふと影を落して去来するものは、不安な世界の姿である。

〃黄金の六十年代〃の呼び声で、去年もおとしも明るい〃歴史の曲り角〃が到来するかと待望された。が〃黄金の年〃はまだ来ない。新年ごとに「今年こそは」と期待する人類の悲願を裏切らぬよう、ケネディさんよ、フルシチョフさんよ、梅一りん一りんずつの暖かさで世界の冷戦をとかしてもらいたい。

（三七・一・一）

寅・虎

ことしはトラ年だとあって、酔っぱらいの大トラがはびこったり、内外の情勢が暴走したりしないかなどと冗談にいわれる。もちろん十二支（子丑寅卯）は十干（甲乙丙丁）と組合せた暦法で、年月日や時刻、方位をさすものだが、いつのころからゴロ合せのように動物を配してネズミ、牛、トラ（虎）などと並べるようになった。ネコが抜けたのは、それに当てはまるゴロがないからだろう。

トラはアジアの特産でアフリカにも欧米にもいない。イソップ物語にトラが登場しないのもそのためだ。アジアでも朝鮮まで分布しているのに、一衣帯水の日本列島には有史いらいトラがいたためしがないそうだ。トラは千里も続く国でなければ住まぬといわれる。

トラの皮が日本に初めてきたのは欽明天皇の六年（五四五年）で百済に使いした者が持帰った。生きたトラの子は宇多天皇の二年（八九〇年）に初めて渡来し、巨勢金岡がそれを写生したのがトラの絵の元祖だという。秀吉時代に武将たちが朝鮮から生捕りにして帰り天覧に供した。

トラうそぶいて雲起るというが、シカの鳴声を上手にまねておびき寄せるそうだ。子を愛する親の情愛は深く、千里走っても子を思って千里の道を帰るという。〝トラの子〟はそこからきている。〝老虎〟といっても寿命はわずか二十五年。

トラのことわざは多い。それは多く中国製のもので、トラのいない日本固有のものではなさそうだ。トラの威をかるキツネ（戦国策）トラに翼（韓非子）虎口を脱す。トラを野に放つ。トラの尾を踏む。虎穴に入らずんば虎子を得ず。トラは死して皮を残す。トラ、オオカミより人の口がおそろしい。おそろしいことの代名詞になっている。

孔子さまが弟子たちを連れて中国各地を遍歴した折、墓前で婦人が泣いていた。親も夫も子もトラに食われたという。それならトラの出ぬ町に引越しなさいというと、だって、この村は税金が安いんですもの、と答えた。孔子は弟子たちに説いた。「それごらん。民には重税はトラよりこわいものなのだよ」。

去年はウシ年なのに諸事暴走の傾きがあった。ことしは運転手諸君と核兵器保有国のおえら方に、危険なトラの尾を踏むことのないよう、慎重な戒心をお願いしておきたい。

（三七・一・三）

長谷川伸と田淵寿郎

こんどの朝日文化賞を受賞した長谷川伸氏は意外なほどに〝賞〟というものをもらっていない。「日本捕虜志」で菊地寛賞を受けただけで、本来の〝長谷川文学〟での受賞はこれが初めてだ。

すでに功成り名遂げた元老なので、今さらということもあったろう。が、文化勲章でも純文学畑は多いのに大衆文芸は吉川英治氏ただ一人で、〝大衆〟の名がつくと低く評価されがちなのは、わるい癖だ。

長谷川氏の小説や戯曲は暖い強烈な庶民愛でつらぬかれている。氏自身が小学校もろくに出ず、数奇な生涯で苦労しぬいてきた人だけに、世の下積みになっている人たちを楽しませ励ましそうという気持で書いている。

長谷川氏の作品には〝甘い子守唄〟のような感傷が漂っているが、それがやはり〝日本人の涙〟であり、人情と義理との素朴なモラルに裏打ちされているところが大衆に受けるのだろう。甘いといっても、日本の伝統を踏んまえた土性骨が一本ズシリと通っており、その〝涙の笑い〟にも文学的にきびしいミガキがかかっている。大衆文芸の原型を造った人といえよう。

戦災の焼土のなかから大名古屋の都市づくりをした田淵寿郎氏は、地元と関係者以外あまり知られていないが、こんど朝日文化賞を受賞した。後藤新平ほどの派手さはないが、蛮勇をふるって都市計画の大手術をし、戦災という禍いを転じて福となした。

名古屋人の市民性でやりやすい点もあり、三代の市長も思いきり腕をふるわせたのだが、それでも当時は「家を建てさせないで道路ばかり拡げる」と非難を浴びせられた。土建の技術者らが田淵家に合宿して野菜畑を耕しながら構想を練り、夜行で上京すると日比谷公園の水道で顔を洗って中央官庁に出かけたものだ。

今から見れば都市計画として欠点もあろうが、ほうっておけば今日の東京、大阪のように動きがつかなくなったわけだ。敗戦ボケで虚脱に陥っていたあの時点で大ブロシキを断行し、将来発展の土台を築いたのは、やはりえらい。

終戦直後人口七十万だった東京は、十年後に二百四十万にしかならぬとのケチな見通しで、何の手も打たぬうちにゴチャゴチャと家で埋ってしまった。東京に一人の田淵がいたらと悔まれる。

（三七・一・四）

日清戦争なみの交通死

「免許、とりたて、よろしく」と自動車のうしろ窓にハリ紙してあるのを桐生市で見たという新聞投書があった。「どうぞお先に」の札をぶらさげた車も時折見かける。

謙虚さがユーモアたっぷりににじみ出ていて、ほほえましい。そんな車に出会うとトゲトゲした気分も思わずほぐれる。こうした譲合いと思いやりの美徳がみんなの運転者にあれば交通事故はよほど減るのだが、われ勝ちにあせる世の中で、事故の死傷は年々ふえるばかりだ。

去年一年間の交通事故死は全国で一万二千八百五十八人だった。これは日清戦争中のわが軍人、軍属の戦死、戦傷病死の総数一万三千四百八十八人とほぼ同じである。ことしも正月の五日間で百九十人が交通事故で死んだ。今年中にはまた日清戦争以上の犠牲者が出るのではないか。

交通禍の激増ぶりは〝非常事態〟といってよかろう。政府もさすがに重大視して内閣に交通関係閣僚懇談会を設け、積極的に乗り出した。民間からも交通事故追放の国民運動が盛上がり、三十市と五町が「交通安全都市」を宣言した。

その一つ、静岡市ではこの三学期から八万人の全学童が、兵隊の〝認識票〟のような安全カードを身につけることになった。それには学童の身元、血液型、学校や父兄の電話、健康保険証の番号も書きこんである。

交通地獄〝戦時態勢〟のような真剣さである。静岡県では東海道を突っ走る長距離トラック便や砂利トラ、ミキサー車など〝県外の大型車〟に毎日数人がひき殺される。母親たちも動員されて一万人が交代で暴走車を見張ることになった。それくらいにしないと〝自衛〟できない事態なのだ。

警察庁の調べによると、この数日間の交通事故死のうち半数が「歩行者」であることがわかった。全く〝非武装〟の歩行者はあらゆる点でもっと徹底的に保護されねばならぬ。

〝走る凶器〟の親玉は大型トラックだが、その運転手は衝突しても自分は大丈夫だと横着に考えがちだ。それで大型トラックのボンネットを内側に入れて、バスのように運転手が最前部に出るように構造を変えるべきだとの提唱もある。心理的に面白い着眼だ。専門家の検討を望みたい。

（三七・一・七）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com